

# 幼児教育におけるドラムサークルの効果と課題<sup>†</sup>

## —保育園・幼稚園での実践を通しての考察—

長谷川万由美\*・三原 典子\*\*

宇都宮大学教育学部\*

DC-LAB\*\*

打楽器を輪になって演奏するドラムサークルは音楽活動であると同時に子どもの表現力や、子ども同士の協同意識を高めるものとして有効である。しかし、教育や保育でのドラムサークルの実践は日本ではまだ日が浅く、実施にあたっての課題と効果の検討が必要であると考え、ガイド役のファシリテーター養成と保育園・幼稚園でのドラムサークル実践を二年にわたり行った。

キーワード：ドラムサークル、幼児教育、保育園、幼稚園

### 1. 教育・保育とドラムサークル

村山(2010, 123)によれば、音楽は一人で楽しむこともできるが、他者と協同して演奏したり、楽しんだりすることにより、音楽だけでなく社会的経験を共有することにもつながるといふ。楽器を演奏したり、歌唱したりする技術がなくとも共有できる、音楽を楽しむ機会とはとくに技術や知識が身につけていない幼児期において重要である。このような機会を作るものとしてドラムサークルがある。

アーサー・ハルが提唱したドラムサークルは世界中の打楽器(ドラム・パーカッション)を輪(サークル)になって即興で叩くことで、一つの音楽を作っていく参加型の音楽表現活動である。とくにドラミングの知識や技術がなくとも、ファシリテーターの指導の下、参加することができ、その中から音自体や音楽を協同で作る楽しみを感じるだけでなく、社会的経験を共有することが容易にできる手段だと考えられる。年齢問わずの参加が可能であり、幼児教育でも十分実践できる。

近年、学校でのドラムサークルの実践とその効

果の検証が行われてきており、論文としては、保育園と特別支援学校での実践の記録として西田(2013)や、ドラムサークルを通じた子どもの協同や対話に注目し、音楽活動を通じた子どもの生きる力や自己表現力獲得の過程を分析した村山(2010,2012,2013)などがある。また、教育でのドラムサークルの実践のため、2014年には音楽之友社より『はじめてのドラムサークル—教師と指導者のための実践ガイド』(飯田・石川・菊本・クニッシュ)が出版されている。飯田ら(2014, 29)は、ドラムサークルを授業などで行う効果を音楽面と心と体の面の二面から整理している。音楽面としては拍感・リズム感・アンサンブル感、即興の表現力、合わせる力が向上し、歌唱でも豊かな表現力が発揮できるようになったり、楽器の奏法が自然と身についたりするという効果がある。また、心と体の面に関しては、協調性、自己表現力、コミュニケーション能力が身につく他、ドラムを叩くことによりストレスが発散される効果も見られる。自由にリズムを刻むことができ、誰もが楽しめるドラムサークルを教育現場で実践する中から、気持ちの変化も見られるようになることが実感として報告されているのである。

このように教育にドラムサークルを取り入れることに関心が高まっている一方、実施にあたっては、通常学校にあまりないような打楽器(ジェンベ、コンガ、スルド、ドラブッカ、コンガなど)がある程

<sup>†</sup> Mayumi HASEGAWA\*, Noriko MIHARA\*\*:  
Effects and Tasks of Drum Circle Exercised in  
Early Child Education

Keywords : Drum Circle, Early Child  
Education

\* School of Education, Utsunomiya University  
(連絡先: mayumit@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

\*\* DC-LAB

度揃っていることやドラムを円状に並べるためのスペースが必要になることもあり、一般的に普及しているとはいえないのが現状である。そこで筆者らは、ドラムサークルを行うために必要な環境や学生参加の可能性を検討するため、幼児教育におけるドラムサークルの実践とそのために必要なファシリテーター養成を二年にわたり行った<sup>(1)</sup>。

## 2. ファシリテーター養成研修の実施

ドラムサークルを行うには、ファシリテーターが必要となる。ファシリテーターとは参加者が緊張感やプレッシャーから解放されて気持ちよく楽しめるようにファシリテーション・キューと呼ばれる合図を用いながらサークル全体の進行をガイドする役割である（飯田他、2014：8）。今回は、参加する学生などがファシリテーションを予め理解し、また、部分的にでも担うことができるように、ファシリテーターの養成研修を行った。

平成27年度は学生を対象として、ドラムサークルファシリテーター養成研修を宇都宮大学第一体育

館で平成28年1月12日に行い、教育学部総合人間形成課程の2年から4年の学生23名が参加した。講師を三原が務め、研修に向けて三原が作成した研修テキスト『ドラムサークルのこと』を使用した（図1）。すぐに独り立ちできるスキルを身につけることは難しいが、学生自身がドラムサークルを楽しみ、学生のチームビルディングを図ることができた。

平成28年度には学生に加え、子どもや障害者の支援者も対象とした研修と、主として保育士資格取得を目指している学生を対象とした研修の二回を行った。一回目は宇都宮大学学生会館多目的ホールで平成28年11月12日に行い、受講生は教育学部学生10人、地域の支援者等12人であった。筆者らが講師となり、テキストとして『ドラムサークルのこと（改訂版）』を使用した。

平成27年度研修と同様、参加者がすぐに独り立ちできるスキルを身につけることは難しいが、参加者がドラムサークルの楽しさを味わうことができ、ドラムサークルを通じた一体感を感じることができた。



図1 研修テキスト



図3 平成28年度第一回研修の様子



図2 平成27年度研修の様子

二回目は平成29年2月23日に宇都宮大学峰ヶ丘講堂を会場として、保育士資格取得を希望している教育学部教員養成課程3年13人が参加した。多くが11月の研修にも参加していたため、午前に附属幼稚園の年長児を対象としたドラムサークルのファシリテーションの実践を行い、午後、その振り返りを行うという研修内容とした。

参加した学生からは、ファシリテーターと子ども、また子ども同士が非言語的方法（アイコンタクトや身振りなど）でコミュニケーションをとっていることがよく理解できた、指導するのではなく子どもたちのやる気を引き出すファシリテーションの重要性についての認識が深まったなどの感想が寄せられた。



図4 平成28年度第二回研修

### 3. 幼児教育におけるドラムサークルの実践

#### (1) 保育園年長組での実践

ファシリテーター養成研修を受講した学生も参加し、幼児を対象としたドラムサークルを平成27年度に一回、平成28年度に二回行った。

平成27年度は宇都宮大学まなびの森保育園年長児クラスを対象として、宇都宮大学UUプラザにて平成28年3月2日にドラムサークルを実施した。ファシリテーターを三原が担当し、1月の研修を受講した学生3名が補助として参加した。



図5 保育園年長児のドラムサークル

幼児を対象としたドラムサークルということで、最初からドラムを並べるのではなく、リズム遊びからはじめ、徐々にリズムを使って集団内の一体感を高め、こどもに人気のある楽器が特定のこどもに固定しないように工夫しながら1時間半弱のプログラムを楽しんだ。年長児担任の事後の子どもの様子などを含めた感想としては「こどもが本当にリズムを楽しみ、ひとつとなって演奏でき楽しい時間をすごすことができた。園に帰る途中や帰ってからいろいろなものでリズムを出したり、体を動かしたりとい

う余韻を感じることができた」ということであった。また参加した補助の学生もそれぞれの役割を分担しながら、プログラムの進行に参加することによって、「ドラムサークルの効用を再確認し、さらに自分たちも一緒に演奏することでドラムを楽しむことができた」、「子どもたちが集中して参加している様子を見て、子どもたちにとって本当に楽しい活動であることが実感できた」などの感想が寄せられた。

#### (2) 幼稚園年長児を対象としたドラムサークル

前述の通り、平成28年度は研修に先立ち、午前に附属幼稚園の年長児を対象としたドラムサークルのファシリテーションの実践を行った。平成29年2月23日の実施当日、附属幼稚園の年長児二クラスに対して、それぞれ約30分のドラムサークルを行った。メインのファシリテーションは三原が担い、11月の研修を受講している学生が部分的にファシリテーションを担った。



図6 附属幼稚園でのドラムサークル

実施にあたっては、まず三原が会場のホールに入る前の廊下で、子どもたちと簡単なリズム遊びを行うことで、子どもたちの期待感を高めるとともに、ファシリテーションに注目する心構えを醸成した。

ホールにはあらかじめ、子どもの人数と参加した学生の人数に合わせた椅子とドラムなどを二重の円(サークル)に配置して準備した。子どもの入室前には、学生が輪の中でバランスよく間を開けて席に座り、ドラムなどを叩きながら、子どもを迎え入れ、学生の中に子どもが座るように促した。三原がメインのファシリテーションを担いながら、後半は学生が簡単なファシリテーションの合図を出すなど研修の成果を子どもたちに試すことができた。

ドラムサークルの中では、子どもが一人ずつオリジナルのリズムで叩き、そのリズムを参加者全員で模倣して叩く（エコー）を行った。最初は不安な表情だった子どもが、自分のリズムに全員がついてくるという体験に満足そうな表情に変わっていったのが印象的であった。

子どもたちとともにドラムサークルに参加した年長児クラスの担任からは「ドラムサークルの中で、即興のリズム表現を子どもたちがどれほど楽しめるかと思っていたが、全体のリズムが揃う雰囲気や、皆で強弱が表現されていく醍醐味、即興でもそれが共通のリズムとして集約する面白さなど、それぞれに体感し、充実したひと時を過ごすことができた」という感想を得た。

#### 4. ドラムサークル実践の効果と課題

本稿では二年にわたり行った幼児教育におけるドラムサークルの実践とそのために必要なファシリテーター養成について報告を行った。二年間の実践を通じた成果と課題について最後に整理しておきたい。まず成果としては、基礎的なファシリテーション研修でも学生がファシリテーションを担えたことが挙げられる。また学生も子どもたちと一緒にドラムサークルを楽しみながら、子どもの感受性や非言語でのコミュニケーションの豊かさに気づく機会となっていた。これは指導ではなくファシリテーションという立場で関わるからこそ引き出した子どもの可能性ではないかと思われる。一方、参加した子どもたちを見てみると、今までの打楽器経験とは関係なく、リズムを楽しみ、他の子どもたちとリズムを作り出すことに熱中する姿が見られた。その中で、自分だけが目立ちたい、自分の気に入った楽器を他の子に取られたくないというような行動はほとんど見られず、輪の中で他の子どもたちの様子を感じ、一緒に場を作っていくことに幼児ながら役割を見出していたように見受けられた。幼児教育の一環としてドラムサークルを継続的に続けることで、このような傾向が、他の活動などにも良い効果をもたらすのではないかと考えられる。今後、継続した取り組みの中で検証を続けていきたい。

また課題としては、音楽室や教室に楽器があり、移動させる必要がないような環境でなければ、準備が大変であることはやはり否定できない。またドラムサークルを体験したことがある人が教員に少な

く、主旨を説明し賛同を得るのがむずかしいところはまだある。教員免許状更新講習や教員セミナーなどの機会も活用しながらドラムサークルの効果と楽しさを教員が体験できる機会も作っていきたい。

#### 参考文献

- アーサー・ハル（2004）『ドラムサークル・スピリット』エー・ティー・エヌ
- 飯田・石川・菊本・クニッシュ（2014）『はじめてのドラムサークル—教師と指導者のための実践ガイド』音楽之友社
- 西田治（2012）「『音あそび』に関する実践報告—特別支援学級および保育園における事例を中心として—」長崎大学教育実践総合センター紀要第11号、175-193
- 村山ひろみ（2010）「『ドラムサークル』を用いた生きる力のための音楽指導—他との協同による「音楽づくり」の指導」福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報第7号、123-128
- （2013）「対話による音楽表現が生む伝える楽しさ」福山市立大学教育学部研究紀要第一号、95-101
- （2014）「音を伝え合い自己表現力を育てる子どもの音楽活動についての考察」福山市立大学教育学部研究紀要第2号、111-116

注(1)本稿で報告した取り組みは平成27年度地域志向教育研究支援事業「地域課題解決に向けたドラムサークルによるチームビルディングの実証的研究」、平成28年度地域志向教育研究支援事業「ドラムサークルを用いたグループワークファシリテーションの実践と検証」の助成を得て行った事業の一環である。また本稿は同事業の報告書の一部を加筆修正したものである。

実施にあたりご協力いただいた宇都宮大学まなびの森保育園、宇都宮大学教育学部附属幼稚園の関係者の方々に感謝する。

平成29年3月31日 受理